

12 間接疑問縮約文の構造

● 間接疑問縮約とは

間接疑問縮約 (sluicing) とは wh 疑問詞節の復元可能な情報部分が発音されない省略 (ellipsis) 現象である。例えば、(1) の間接疑問縮約の例は、(2) の省略の起きていらない文 (非省略文) と同じ意味を持つが、what に後続する復元可能な情報である he (John) was eating が発音されていない。

- (1) John was eating something but I don't know what [____].
- (2) John was eating something but I don't know what he was eating.

一見すると、間接疑問縮約文と非省略文の違いは、復元可能な情報部分 (he was eating) を発音するか否かだけのように思われる。しかし、間接疑問縮約文は非省略文とは異なるいくつかの特性を示す。そのため、「間接疑問縮約文が非省略文と同じ疑問詞節構造を持つのか否か」について研究者間で意見が分かれる。本稿では、疑問詞節構造が存在するという立場 (Ross 1969, Merchant 2001) と、発音される部分の構造のみが存在するという立場 (van Riemsdijk 1978, Ginzburg and Sag 2000)、それぞれに対する証拠をみていく。

● 疑問詞節構造の存在を示す証拠

間接疑問縮約文が節構造を持つと考えられる証拠の一つは、主語と動詞の間での数の一致特性から得られる。たとえば、(3) の間接疑問縮約文では、主語の which problems が複数形であるが、be 動詞は単数形の is である。

- (3) Some of these problems are solvable, but which problems [____] is/*are not obvious.
- (4) ... but [疑問詞節 which problems are solvable] is not obvious.

この数の不一致問題は、(3) の間接疑問縮約文が、(4) のような疑問詞節構造を持ち、復元可能な情報部分 (are solvable) の音が省略されていると仮定すると、節構造を持つ主語は単数形の動詞を必要とするため、(3) において be 動詞は単数形でなければならないと説明できる (Ross 1969 参照)。

さらに、wonder のような述語の選択制限 (selectional restriction) からも、間接疑問縮約文が疑問詞節構造を持つことが示される。(5) に示すように、ask と異なり、wonder は、その目的語として名詞句ではなく節をとらなければならないという選択制限をもつ (Pesetsky 1982 参照)。

(5) a. *I wondered [名詞句 the time].

b. I asked [名詞句 the time].

c. I wondered [疑問詞節 what the time was].

(Pesetsky 1982: 183)

wonderの選択制限を踏まえると、(6) の間接疑問縮約文では、発音されるのは how many men という名詞句のみであるが、wonder の後には (7) のような疑問詞節構造が存在するはずである (Ross 1969 参照)。

(6) She says she is inviting some men.—I wonder how many men [__].

(7) a. I wonder [疑問詞節 how many men she says she is inviting].

b. I wonder [疑問詞節 how many men she is inviting].

これらの特性を見るかぎりでは、復元可能な情報部分が発音されるか否かという違いはあるものの、間接疑問縮約文と非省略文は同じ疑問詞節構造を持つように思われる。

● 疑問詞節構造の存在を否定する証拠

間接疑問縮約文は、非省略文と異なる特性を示すことがある。たとえば、(8) に示すように、非省略文では、節頭位置の wh 要素が前置詞に先行する語順 (who to) が許されない。他方、(9) に示すように、間接疑問縮約文では、wh 要素が前置詞に先行する語順 (who to) が可能である (Merchant 2002 参照)。

(8) a. [疑問詞節 To whom/*Who to was Lois talking]?

b. I don't know [疑問詞節 to whom/*who to Lois was talking].

(9) Lois was talking, but I don't know who to [__]. (Merchant 2002: 294)

また、(10) に示すように、非省略文では、the hell による節頭位置にある wh 要素の修飾が可能であるのに対し、間接疑問縮約文では、(11) のように、the hell による wh 要素の修飾が不可能な場合がある (Sprouse 2006 参照)。

(10) [cp Who the hell knows [疑問詞節 what the hell he is doing]]?

(11) They were arguing about something, but I don't know what/*what the hell [__]. (Sprouse 2006: 349)

これらの違いは、間接疑問縮約文が非省略文と同じ疑問詞節構造を持つとする説明しがたいものである。

● まとめ

間接疑問縮約文が非省略文と同じ疑問詞節構造を持つことを示す特性とその反対のことを示す特性が存在する。これらの相反する特性に対する説明が求められる。

(木村 博子)